

海軍従軍画家の現地通信

——住谷磐根「江南画信」「続江南画信」——

東中野 修 道 編

海軍従軍画家の現地通信

住谷磐根は明治三十五年（一九〇二年）に群馬県群馬郡国府村（現、高崎市）に蚕種（さんしゆ）で産を成した地主の家に、七人兄弟の四男として生まれた。父は村会議長と村長を歴任した村の素封家であった。母は近村のクリスチャンの漢方医（のち蘭方医）の長女であった。七人兄弟のうち長兄は夭逝したが、次男の悦治は東京帝国大学に進学し、戦後同志社大学総長となっている。六男の申一は同志社大学に進学し、同じく戦後は同志社大学教授となった。最初養蚕業についた磐根は画業を志し、両親の支援のもと上京して、大正十年（一九二一年）川端画学校に学んだ。大正十二年、のちに日本プロレタリア劇場同盟の中心人物

となる村山知義の前衛美術団体「マヴォ」に参加し、同年二科展に「工場に於ける愛の日課」と「唯物弁証法イワノフスミヤヴィツフ・スミヤヴィツチ」を出品して入選を果たしている。そのイワノフ・スミヤヴィツチが住谷磐根のペンネームであったことから知られるように、戦前は前衛絵画運動に活躍したが、戦後は油絵から水墨画に転じて東洋画展を開催するかたわらインドやインドネシアなどに古美術探勝の旅を続けた。昭和五十三年（一九七八年）、磐根の作品は政府に買い上げられて東京国立近代美術館が所蔵し、東京都にも買い上げられて上野美術館（東京都美術館？）が所蔵している。⁽¹⁾ 平成四年（一九九二年）日本海

海戦を記念する「対馬の海」を三笠記念館に収めたが大作のため展示できず、これは東郷神社に奉納された。^②

さて私たち南京占領研究者にとって住谷磐根は、「証言による『南京戦史』^⑩」に出てくる「住谷磐根の回想（第三艦隊従軍画家、安宅乗組）」で馴染みが深い。従軍画家として上海南京戦に従軍した住谷は、「揚子江遡攻艦にて十二月十三日 住谷画」とか「中山門城外 十二月十三日 住谷画」といった絵の落款がしめすように、昭和十二年十二月十三日南京陥落直後、城内に入った。

「私は当時、揚子江の第十一戦隊旗艦安宅に乗組んでいたが、南京が陥落した直後、下関碼頭から新聞記者の自動車に便乗して、興中門の累々たる伏屍を越えて南京市内にいった。^⑪

人っ子一人歩く者はなく、無人の街、建物は半焼けの家並みであった。自動車から降りて自転車を持った。少々ペダルの工合が悪い、スピードは出ないが、結構乗れる。これで南京市政府や参謀本部、市政会館へはいつてみたが、森閑として人影はもちろん全くない。部屋の中は馬糞と藁が散乱している。これは、軍馬を屋外に繋いでおくと日本

の渡洋爆撃に遭うため、中に入れたからであろう。

突入した日本陸軍の大野・脇坂部隊などは、それぞれ屋根のある建物を選んで駐屯している様子で、日本の兵士の姿は見当らない。死せる南京という言葉が適当であった。

（中略）

その翌日、南京に全く市民の人影一人いないことが不思議であったので、例の自転車で市内を少々めぐってみると、市の片隅に〈立入禁止避難民区域〉と、横幕が通りに張り出している。その中は言葉に絶する混雑をさわめた避難民の町であった。^⑬（傍点筆者）

約五十年も昔の出来事がまるで昨日のように回想されている。それが私には印象的であった。歴史的な南京陥落が鮮明な印象となつて脳裏に焼き付いていたからだとしても、四十六年後にここまで具体的に固有名詞が時系列的に思い出せるものではない。自らの日常生活に不可欠な生年月日は誰しも覚えているものだが、「私」が初めて職を得て喜んで上京してきたのは何月何日だったのか、初めて海外に渡ったのは何月何日だったのか、その日はどこに泊まったのか、具体的に覚えている人は殆どいないであろう。誰し

も記憶は薄れるものだからだ。それが判明するとすれば、記録が残っている時である。ひょっとして住谷は往事のことを何かに書き残していたのではないか。

今から七年前にそう気づかされて、住谷磐根とそこご遺族を捜し始めた時、氏の『点描 武蔵野』（昭和五十五年）の奥付に記されていた現住所に驚かされた。住谷は本学から自転車です十分ほどの所に住んでいたではないか。早速訪ねていったところ、隣人は、住谷とそこご遺族を知らないと答える。もはや万事休すの思いであった。

ところがそれから二年ほど経った頃、未知のT氏から「海軍従軍画家・住谷磐根」が贈られてきて、また驚いた。やはり住谷磐根は記録を残していたのである。海軍機関学校と海軍大学校を出て大尉で退役したのち我が国初の民間飛行機製作所を立ち上げた群馬県新田郡（現、太田市）出身の中島知久平を調べるため、氏が群馬県立文書館の「上毛新聞」（マイクロフィルム）を検索していたところ、住谷磐根の「江南画信」「続江南画信」と題する寄稿文が偶々氏の目に入ったのである。これは戦後の政治社会思潮に汚染されていない当時のありのままの記録であっただけに、そして長くはないがそれでも陥落直後の南京の実地検証と

しては最も広範囲にわたり視察期間としても最も長時間に及んでいただけに、質量ともに随一の記録であった。歴史的に見て超一級の価値ある史料の発見であったと言つてよい。

本稿は氏から頂いた「上毛新聞」の「江南画信」「続江南画信」の復刻である。屋上屋を架する嫌いなではないが、氏の復刻した貴重な住谷の「上海南京便り」がそれから五年を経ても殆ど知られておらず、誤植は（どうしても避けがたく）散見されるため、正確を期して元校閲者F氏の校閲を経て復刻した。発見者のT氏と校閲者のF氏に、深甚の謝意を表するものである。

なお「江南画信」の江南とは上海南京など揚子江の南の地方を言い、いずれも住谷の戦地通信と住谷の得意とする画の二つから成り立っている。そこで、「絵画付き通信」ないしは「絵通信」（第十信）という意味で、「画信」と題されたのであろう。それを連載した上毛新聞は群馬県前橋市に本社を置く日刊新聞社であり、郷土連隊の高崎百十五連隊が上海南京戦に参戦したことから、同じく高崎出身の住谷が従軍画家として出征する前に、その連載が両者の間で企画されていたのであろう。住谷の記述には今日読んで

も私など舌を巻くほどの詳しさがあり、いずれも事前の十分な準備があったことを偲ばせるものである。

「江南画信」の第一信は「上海黄浦江に入る」と題して、南京陥落から二十日後の昭和十三年一月一日に掲載された。第三信に「戦線が遠く南京方面にあるので、上海は復活の色濃く」と記されていることから、住谷は昭和十二年十一月十二日の上海陥落後に上海に入ったことになる。最後の上海便りは昭和十三年一月十二日の第十一信「北停車場及び鉄路管理局」となった。一月二日は休刊であったから、連載十一回であった。

上海戦については、「頑強そのものの敵陣は家屋から家屋へ、床下深く掘り下げて、全くのもぐらの巢」とか、「□北初等中学……中国童子軍第一一六七軍等と掲げあるが抗日教育の甚だしき学校の跡にて、……校屋は惨状筆に尽くし難し」といった第九信の紹介のほか、「問題の商務印書館」という第十信は数千名の職工が抗日教科書と支那紙幣を発行していたことを伝えている。

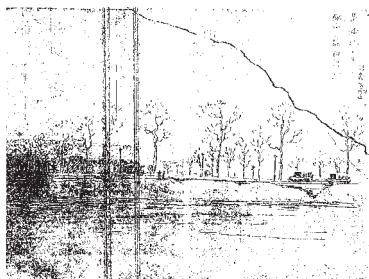
昭和十二年十二月十二日、海軍従軍画家の住谷は南京攻略の軍艦に便乗して南京に向かった。⁽⁴⁾ 陥落後の南京では十七日の入城式と、十八日の中支那方面軍戦没者慰霊祭に出

席したあと、十九日には南京上流の蕪湖^{ぶこ}の攻略戦にも参加し、翌十三年一月三日に上海に戻っている。日本と通信可能な上海でこの間の見聞談を書き上げ、それを「続江南画信」として二月十六日から上毛新聞に連載して、三月十九日の第三十二信に慰霊祭を報告して筆を擱いている。一カ月以上の三十二回におよぶ長期連載であった。その南京便りも上海便りと同じく一つの見事な戦地通信となっていて、私たちの知らない事実を数多く伝えている。住谷の体感した陥落後の南京は、一人歩きなど誰も考えだにしない、敗残兵と野犬の出没する、それゆえ友軍から発砲されかねない危険な戦場であった。

復刻に際しては歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改め、「之」「呉れて」「居る」「処」「云う」「然し」「然に」「僅か」「外」「乍ら」「可く」「其の」「御」「達」「位」「他」「於て」等の漢字を平仮名に改めたほか、適宜句読点を入れた。また文中に頻出する「支那」という言葉は中国最大のポータルサイト「sina.com」^{シナドットコム}や「sinologue」^{シナローグ}（シナ学者）という英語がしめすように差別語ではなく世界共通語なのでそのまま復刻した。

(1) 「江南画信」

【第一信】 上海黄浦江に入る

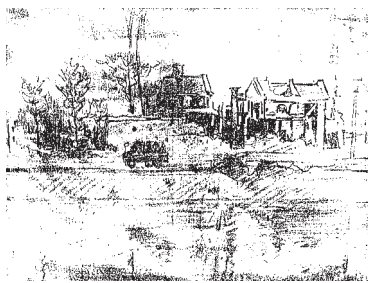


「戦雲の 遠ざかる秋 後れ
馳せ」。これは私の乗った上
海丸の機関長室にあった中川
紀元君の色紙に添えた一句で
ある。私も同じ気持ちで上海
丸の客となったわけである。

◇：機関長も知り合いの人で
優遇してくれて、荒れてると
いう支那海も少しも苦痛なく、
はじめて見る大海の船客となつた眺めも楽しく、荒浪の務
長、医務長、さては厨司長までが、機関長室に私を囲んで、
長崎からたった一昼夜を、残り惜しく物語るのである。話
は皆□線美談で尽きぬのも、軒一トうねりさえ画境を誘う
程であつた。船長、事時の航海を裏書する。◇……上海丸
はこの事変に非常な輸送の大役を引き受けた。従つて乗組
員諸氏も黄浦江（注、上海を通じて揚子江に流れ込む河）
を幾度となく上下して軍艦の援護の下に活動を続けたわけ
で、浦東（注、上海の黄浦江の東岸）からの爆撃を眼のあ

たり見た勇者たちである。◇……船が揚子江から黄浦江に
這入ると、右手に並木路が河に添うて走っている辺り、の
どかな晩秋の陽光を浴びて、陸軍のトラックや自転車の兵
士や荷車を取り囲んだ兵がまばらに見え、船に向つて遠く
から万歳と両手を挙げているもの見え、全く静かな大陸の
風景である。（昭和十三年一月一日掲載。なお絵の落款は
「黄浦江にて敵前上陸附近 住谷磐印」となっている）

【第二信】 敵前上陸地附近



長崎を出港して一昼夜の午
後二時半、浪も立たぬ黄浦江
を航行している上海丸から眺
める大陸の風景。まさに晩秋
の陽光は、スズカケ並木道を
遠く走らせて平和の色である。
◇……機関員は指して「あの
あたり一帯が敵前上陸の地で
す」と教えてくれる。敵の砲
弾を浴びつつ河岸に昇つては水に落ち、歴史的悲慘をなめ
たところとは思えぬ静かな河岸風景である。我が艦隊の援

護射撃に勇を得て、向かい撃ちの敵の砲火をもとめせず、遂に世界史上に輝く攻略を果たした地。今、ご用船の二、三の姿を浮かべ、小舟の往復が秋光を浴びて、全く静かな河畔である。◇……遠く近く砲弾を見舞われた廃屋、点見して僅に戦塵の香りを止めている。(昭和十三年一月三日掲載。絵の落款は「呉淞(注、黄浦江が揚子江と合流する左岸にあり、ここから上海へと入る)近シ、船中ニテ住谷画印」となっている)

【第三信】 上海上陸



上海の港に近く這入ると、眼に入る建物という建物、皆、弾に破れて惨状見るに忍びぬものである。新聞の写真、ラジオの放送を通じて知った戦況を思い浮かべて一人の感に打たれる。◇……船が止まってドラが響き渡り、出迎える群集を船から見下すと、顔、顔、顔、皆歡喜に満ちた我が居留民である。戦線が遠く南

京方面にあるので、上海は復活の色濃く、戦時の波止場は陸海軍人の姿も多く、貨物の方は兵站部活動が忙しく見える。波止場のしばらく雑踏の有様は読者諸氏のご想像におまかせして、筆を市街に進める。◇……これが国際都市上海かと思われる淋しさで、人通りも極めて少く、立ち並ぶ高樓は廃屋そのまま、住む人はなく、会社商店も、支那民の避難の跡。戸は破れガラスはこわされ、戦禍の跡は静粛に深閑としている。時々軍用自動車や、自転車の兵の往復を見る。◇……街角辻に大男の印度人の巡查が暇そうに、交通の整理に当たっている。しかし何んとも言われぬ異国情緒は、胸に浸みて来る。(昭和十三年一月四日掲載。絵の落款は「第三信 住谷印」となっている)

【第四信】 支那兵の立て籠った南洋煙草会社

波止場から百老匯路(黄浦江に添うた街□)の中央まで来ると、見るも凄惨に破壊された大きな建物が特に眼立つ。これは多数支那兵がたてもより頑強に我が陸戦隊を苦しめたる最初の激戦地であるところの、南洋煙草会社社である。◇……港の堡壘に青、赤、黒の色とりどりの□扉の建築物の並ぶ中に、この煙草会社は特にコンクリートのビルディ

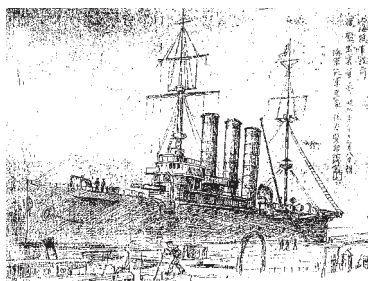
距離は僅か十メートルくらいで、その苦戦の程は今の地に立ってはじめて認識を新たにしているものである。(昭和十三年一月五日掲載。絵の落款は「東百老瀟路 南洋煙草会社 住谷画印」となっている)



ングであつたが、窓という窓は火焰を吐いて、片くずれのむごたらしさである。虹口クリーク(注、江南地方独特の狭いが深い川)をはさんで対峙せる市街戦の代表地とも目される今事変の初期の地点の一つである。◇……街の中の小溝の向こう側とこちら側の

【第五信】日本人租界に入りて

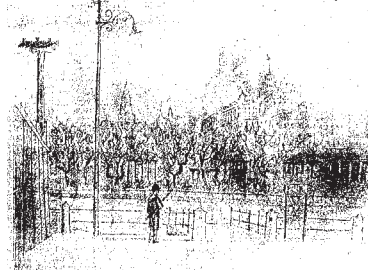
虹口クリークを超えるところは、橋のたもとに水兵の歩哨二名両脇に立ちて、交通の人種を厳重に臨検している溝に添うた道は、鉄□□(注、鉄条網?)で遮断されてある。そこから東百老瀟路に□き、左へ曲がったところに日本領事館があつて、旗艦出雲もその黄浦岸壁に横着けに勇姿を



厳然と見せている。◇……呉淞路を中心に百老瀟路、漢壁□路、乍浦路等、即ち虹口(注、またはホンキウ)クリークから北四川路の間が日本人の最も居住せる地区であるが、目下市街は復興に甦り、陸の兵も多数往行し、三カ月に余る戦塵の跡、ようやく自動車

の動きも頻繁を加え、修理なりたる自転車が復興の勢を誘い、形ばかりの店や、釘打ちにして避難した人々が一船毎の入港に人口も加わり、活気ようやくみなぎりつつあり。◇……しかるに夜は厳重なる灯火管制で、全く闇である。戦源の地上海なればこそ、その徹底せる灯火管制振りは想像のほかである。東京の灯火管制を受けて来た吾人(注、私たち)は思い半ばを過ぐるものがある。その適確さは、実戦の砲声、軍の襲撃に夜毎を暮した尊い経験の賜物でありとしみじみ感ぜられる。(昭和十三年一月六日掲載。絵の落款は「上海領事館前、旗艦出雲勇姿 昭和十二年十二月八日朝 海軍従軍画家住谷磐根謹写印」となっている)

【第六信】 旗艦出雲に長谷川長官を訪う



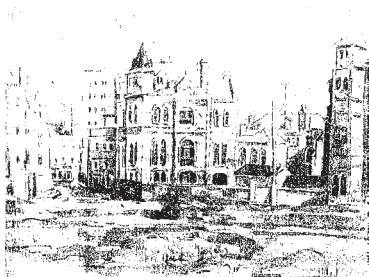
支那大陸の晩秋は晴れて、上海の空はまばゆきばかり。午前九時、謹厳襟を正して朝日を拝す。この日、旗艦出雲に長谷川司令長官閣下をお訪ねする光榮を浴す。◇……今事変に我が光輝ある海軍史に厳然榮譽をにない海軍の威信あるところを全世界に發揮せ

られ、上海戦線において我が国民の信頼を集められた海の英雄長谷川閣下は軍務ご多忙の中を、繰合せられてご面会を賜った。◇……長官の知友からの紹介状は、すでに副官からお手許に届けられてあり、殊のほか快く話されて、又後日の約束せられ、僅か数分にして私は退室したのであったが、今事変に殊更^{ことごと}尽忠報国の精神を遺憾なく發揮し良く軍を司令せられたその功績の程は、吾々国民の感謝のほかなき次第であって、この数分中に私も国民の一員として、僭越ながら代表せる気持で篤く敬意を表したのであつた。◇……出雲の戦功武運は今ここに喋々するまでもなく、

我が国民の充分周知のことではあるが、今事変に際してもこの大姿を黄浦江の河辺りに領事館近く投錨し、敵砲の一攻撃の真只中であつて少しも弾痕を受けぬという神ながらの艦と言うべく、今その出雲は大陸の空高く軍艦旗をはためかし、敵を遠く南京に退散させたのである。近き将来東洋の平和をもたらし、世界にその敵をみぬ時をよく約束するの如く、冬の陽光を浴びている。◇……私は士官室に帰り少憩□内に士官勇将の戦場□語（注、物語？）りに多くの感激を受けつつ、出雲を辞去したのである。（昭和十三年一月七日掲載）

【第七信】 ガーデンブリッジの向こうの街

蘇州河が黄浦江に流れ入る河口にガーデンブリッジがある。橋を渡る境界は殊のほか厳然と警備する我が陸戦隊員の歩哨が駐屯している。◇……橋の向こうたもとに英国領事館ありて、続いて郵船会社、正金、中国、朝鮮、三井、住友等、我が銀行の上海支店が堂々と林立し、仏国領事館の方にかけて黄浦灘路の大ビルディング街であり、日清、大阪、三菱等各会社も外国会社は何の遜色なく構えて、こへ来て本當に異国情緒を濃厚にするのである。◇……二

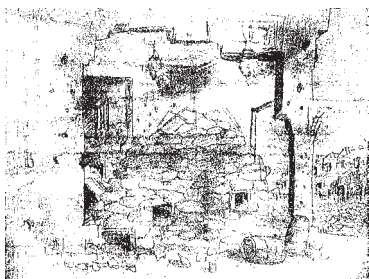


階自動車が往復し、電車も外国映画に見るその如く、珍しい色画スタイルである。この方面は北京路、南京路、広東路ありて、今事変に支那人及び各国人が避難して逃げ込んだ方面で、橋の向こうへ追われた人種は、絶対に日本人租界に這入ることは出来ぬの

である。従って、その混雑の情態は大したものである。各国人が往来し、夜は全く不夜城の感あり、橋のこちらは灯火管制で全くの闇に比べて、一口に上海と言っても別世界である。◇……所謂旅行者として画家としてその風景に接する時、異国の情緒に満喫する風景そのものであり、殊に今、街路樹は秋色を見せて往来の人も服装に色とりどり、戦禍なきエトランゼならば何と楽しき街なる哉。(昭和十三年一月八日掲載)

【第八信】激戦の跡^ざ開^{はく}北に歩を運ぶ、北四川路

上海市中最も多く支那人の住居して、日本人街と隣接せ



るところは北四川路といへく、商店も殆どが支那人であつた由。今嚴重に警備し、陸戦隊兵士は緊張して歩哨しおる。通る人なく、街は死の街、昼でも街路の続く果てまでも、警備の兵のほか人影はない。◇……この北四川路を北上して、我が陸戦隊本部に

真直ぐに通じ左手一帯を開北と言う。商務印書館、北停車場等あり、郊外には江港鎮、大場鎮、廟行鎮等、読者諸君のよく知る方面に通ずる道路も、この北四川路を發して上海市を離れるのである。◇……種々雑多な店看板の下にさぞにぎやかであつたであろうこの街路も、廢窟のガラガラである。用なき街ゆえ、私は夜を知らぬところなるも、灯火管制の命令なくとも、住む人なき街のことならば、夜の暗さは推して知るべしである。(昭和十三年一月九日掲載)

【第九信】土師部隊戦跡を訪う

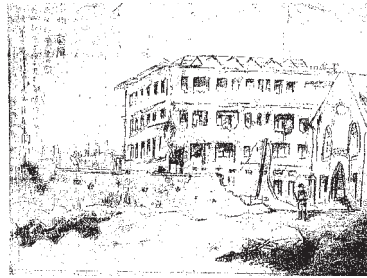


閘北の敵に向かつて最左翼を承った土師部隊の奮戦の地、頑強そのものの敵陣は家屋から家屋へ、床下深く掘り下げて、全くのもぐらの巣、

階下の窓はことごと土囊で塞ぎ、厚さ六、七尺銃口の出るだけあけて防御せる彼ら支那兵の非人道的策戦に良くも打ち勝った我が陸戦隊の強さに、今さら驚き、敬意を捧げるものである。◇……宝山路に出ずるところ、虹江路に□北初等中学と言うのがある。十月二十七日占領と立札がある門標金看板に中国童子軍第一一六七軍等と掲げあるが抗日教育の甚だしき学校の跡にてこの堅塁も言語道断である。◇……土□の方向にて敵の吾が方に対峙せる様子を知らるが、校屋は惨状筆に尽くし難し。これに向かった吾が軍の某三等兵曹の墓が鉄路の傍の冬草の中にあり、花と香が供えてあり、十月二十七日^{あかつき}暁の総攻撃に名誉ある護国の華と散った勇士である。(昭和十三年一月十日掲載。絵の落款は「河

南路附近閘北の□住谷画「印」となっている)

【第十信】問題の商務印書館



閘北一帯の中心とも言われる今事変の支那軍の陣地の商務印書館はどでかい建物で、あたりを圧していたであろう廃墟である。◇……この前の上海事変で、すでに廃墟と化したビルディングであるが、今回は長い抗日計画で陣地を作り、佐野部隊と大西部隊の

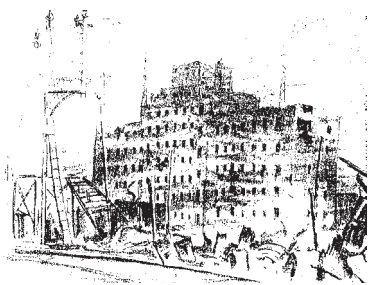
十月二十七日、暁の総攻撃に破れたものであるが、随分長い間頑強に抵抗した支那軍のこの商務印書館とは、宝山路をはさんで建ち、我が陸戦隊本部への通路に大きく道を掘り割って、タンク、装甲車の通行を遮断したのである。◇……この附近の民家一帯は、ことごとく敵の陣で、我が方を悩まし続けた、にくむべき戦跡であることは今更申すまでもあるまい。◇……商務印書館は半官半民の大印刷会社で資金数千万円、数千名の職工を以て、抗日教科書を発行、

支那全土に配り、なお支那紙幣をも発行し、日本の印刷局を兼ねたもので、前の上海事変までその勢いは東洋一と誇ったものである由。◇……その後、支那紙幣は主にアメリカの印刷によるとのことである。

南京攻略の軍艦で遡航

ご無沙汰いたしました。上海戦線歴訪中、南京攻略の軍艦の便ありて便乗。南京に向かい入城式、慰霊祭に参列。十九日に蕪湖遡攻戦に加わって残敵を掃蕩し、昨日南京の本艦まで帰りました。南京砲撃、蕪湖砲撃ともに揚子江の中から火焰深々と、兩岸の火災は東京大震災の如し。郵便の便、頗る悪く、戦っている軍艦からとても絵通信が出来ず、とにかく正月三日に上海に戻り、原稿をお送りします。前中（注、前橋中学）出身田村中佐と南京の長江にて一夜語りました。同〇〇司令です。いずれ後便にて、これが年頭の辞かも知れませんが、謹んでお慶び申し上げます（帝國軍艦〇〇士官室にて 住谷磐根）。（昭和十三年一月十一日掲載。絵の落款は「北ノ堅陣 商務印書館 大西部隊、佐野部隊 十月二十七日曉総攻撃 第三艦隊従軍画家住谷画 印」となっている）

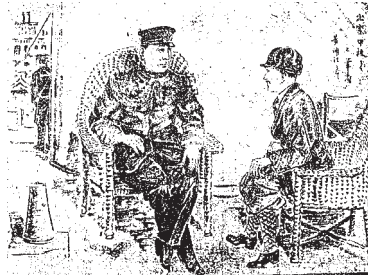
【第十一信】北停車場及び鐵路管理局



虹口方面の高い建物の上から西北を眺めると、北四川路の向こうに薄黄色の高い建物ありて、我が海軍旗の翻るを見る。◇……これは鐵路管理局であり、北停車場はその下にある。苦戦の結果、ようやく敵を撃退させた問題の場所であり、この地の陥落を国民こぞりて待ちに待ったところもある。◇……幾多写真に發表されて、私の画筆の及ぶところでないかも知れぬけれど、閘北の激戦地、はるかに遠く眺めて感慨の結果、遂に画筆を以て、追憶に耽る。◇……海陸呼応して、敵を遠く追った記録的地である。（昭和十三年一月十二日掲載。絵の落款は「閘北 鐵路管理局 住谷画 印」となっている）

(2) 「続」江南画信

①南京行きの許可下る

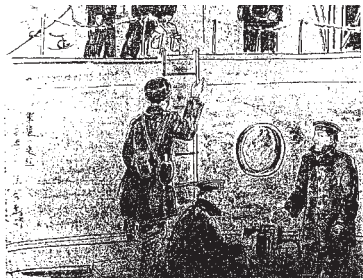


◇……上毛新聞の読者の皆様
に通信が大変遅れたことをお
わびいたします。私は揚子江
を廻る戦闘に参加して、上海
へ帰れなかったのでありまし
た。南京入城式、南支那方面
戦死者の慰霊祭等の場面に言
及いたしお伝えいたしたいと
思います。◇……十二月十二

日、海軍武官室から私の宿所へ電話があつて、上流へ廻江
する軍艦があるから希望通り便乗を計ることと、勇躍
旅装もそこそこに軍艦出雲へ早朝駆けつけました。◇……
内火艇（注、内燃機関で走る小艇）が出るまで出雲の甲板
にて○○とお話を交え、出雲の大砲の傍らの椅子によって、
冬の日を浴びて○○のお話や面白い海軍軍人の日常等、
吾々に限らない喜びを与えます。◇……そこに艦長岡大佐
副長等がみえて、戦雲の中の閑日寸時、麗かな風景です。

八月、九月は浦東から猛烈な砲撃、空爆を受けて、夜は夜
でサーチライトを絶え間なく照らして激戦したその甲板で
す。（昭和十三年二月十六日掲載。絵の落款は「出雲甲板
にて（アキ）と筆者／黄浦江にて」となっている）

②駆逐艦にて長江を廻る

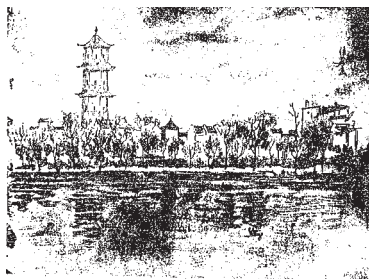


◇……駆逐艦○は平素揚子江
を上り下りして漢口を中心に
警備に当たっている。艦に乗る
喜びに胸を躍らせてボートに
乗り旗艦出雲を離れた。◇

……朝の黄浦江の風に軍艦旗
をはためかせて青銀色の駆逐
艦に近づいた。双眼鏡を胸に
下げた当直将校の案内にて士
官室に入ると、艦長、機関長、砲術長、航海長、軍医長等、
はちきれそうな元気な顔で迎えてくれた。◇……国民の一
員として厚く感謝の挨拶を述べた後で、熱い茶をすすりな
がら、本艦の今事変に当りての奮闘の経路に就いてお話を
伺う。◇……漢口の居留民引き上げ、途中長江兩岸の砲台

を偵察し、上海へ帰りては居留民引き上げを護衛し、戦いの火ぶた切らるるや、浦東の攻撃、呉淞の攻撃、軍工路の敵を砲撃、虹江碼頭に陸軍の敵前上陸、呉淞敵前上陸に陸軍を誘導援護等、功績絶大なるものがある。揚子江にて江陰砲台を攻撃して上海へ帰航して、今又南京へ向かうのである。(昭和十三年二月十七日掲載。絵の落款は「軍艦へ乗組 黄浦にて 住谷画」となっている)

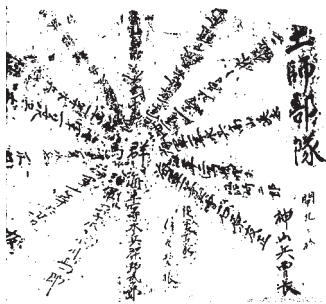
③戦史比類なき敵前上陸



◇……出航用意！ 錨は上げられて黄浦江のさざなみを蹴立てて進行する駆逐艦の艦橋にて、艦長はじめ各配置の士官と共に望遠鏡を離さず、上海を出航しました。◇……航行中絶えず過去の戦況について各士官こもこも勇壮な話に私の胸を躍らせてくれる。◇……呉淞沖を通る時の感激多き士官の熱語、敵前上陸に当りたる劇的シーン、敵弾雨飛、岸には深い塹壕を掘って江

に向かつて猛撃する中を勇敢にも上陸する壮烈さは、世界戦史に未だ嘗て見られぬものであった。◇……その犠牲は甚大なるも、呉淞落ち大場鎮も落ち、急進二百マイル南京をも陥落せし、その功績を思えば、この敵前上陸の策戦は実に尊き極みである。◇……はるかに見ゆる廃墟の洋館、焼け残りたる工場、楊柳の彼方に見ゆる六層の塔、うららかに見ゆる初冬の風景、点形に、陸の兵士三四通りて、我が駆逐艦に両手を挙げて何やらさげぶ。(昭和十三年二月十八日掲載。絵の落款は「ロー 住谷画」となっている)

④上毛健児の寄せ書

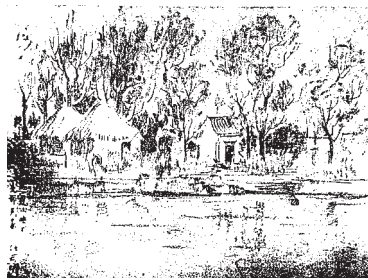


◇……上海戦線において八月下旬、東部上海の激撃最中、竹下部隊は呉淞の敵前上陸に向かうことになり、その後を受けて、上海到着早々、その頃、敵に銃火砲火を放った新参土師部隊は早くも敵情を精密に感受、遂に支那軍を見事に駆逐して、勇氣百倍、閘北に廻り、数

万の敵と奮戦し、北四川路、赫司克路、虹江路の頑強な敵陣と物凄い市街戦を繰り返し、家屋の床下二重三重のモグラ陣地を制圧し、精鋭なる部隊は遂に北停車場、鉄道管理局を占領。◇……閘北ポケット地帯の敵主力を四行倉庫まで追い詰めて、十月二十七日総攻撃に敵は四行倉庫に立て籠もって抵抗せしを、幾度か大乗の見地から降服勧告せしに、濛迷なる敵は我が意に服せず、益々抵抗を続けるを、決然猛撃し、遂に十月三十一日、完全に四行倉庫の頑敵を撲滅せしめ、閘北の敵を掃蕩して、上海戦ここに完結したのであった。◇……私は過日来、すでに十日、土師部隊の指導のもとに激戦の跡を見学し、戦跡スケッチをしているのであるが、紀元の佳節を機会に、隊長のご懇篤なるお取り計らいにて同部隊の内、上毛健児のサインを集録し、郷土の皆様至上毛新聞を通してご紹介報告する光栄を得ました。◇……勇士一人一人にそれぞれ感想を聞いて、感激の時を与えられておりますが、全部の紹介の出来ぬことは残念であります。勇士諸士は帰郷のことは一切忘れて、日夜なお精励の誠を尽して警備に就いております。郷土の皆様へ宜しくお伝えいたす次第であります。「土師部隊」の書は部隊長の筆になるものであります。(二月十一日閘北

ポケット地帯、土師部隊にて。昭和十三年二月十九日掲載)

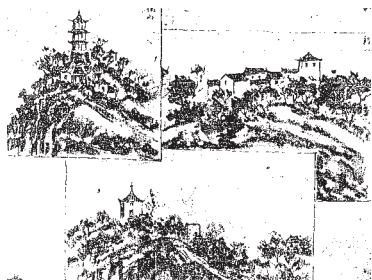
⑤戦争は何处？ 支那大陸



◇…宝山港の御用船○○(注、何隻?) 浮かぶを過ぎて、広い広い揚子江を遡る。「取り舵十度」「ヨーソロ」。艦掛の命令のリズムも軍艦独特なものである。◇……望遠鏡で絶えず右岸左岸を眺める。新緑の如き色をみせた晩秋の楊柳の中に、支那民族の農が見え、農夫は家屋を静かに出て来ると、又一人隣家の農民一人二人、小手をかざして艦を□める者もあり。軍艦の遡江も知らず、テンポも遅く耕土の農夫。肉眼にてはただ一組の□の繁みもレンズに入れば、支那民衆の様子が手に取る如く見える。◇……遡上両岸に打ち続く支那大陸、上流、下流、右岸、左岸、眼に入る限り、ただ広い平野である。望遠鏡なしには全くなんの変化もない一線に霞む陸である。その大陸支那と呼ぶ長江沿岸も支那全土の幾万分の

一つに過ぎぬ。◇……この辺りの農家の土民、文明の何物も知らず、自国の主権者の何者たるかも知らず。朝に晩に年がら年中、長江の濁流を眺め□に吹く風と共に暮しているのである。一生何の変哲もなく、戦争は何処？大陸の土民の姿。（昭和十三年二月二十日掲載。絵の落款は「□遠鏡（望遠鏡？）に映す支那民家 住谷画」となっている）

⑥狼山、軍山、剣山、長江の古蹟



◇……朝から晩まで遙に蘆の

右岸楊柳の寒村の左岸を霞の如く眺めながら、なお駆逐艦は勇ましく遡上る。◇……晩

秋の陽は大陸の彼方に没せんとす頃、パイロット（水先案内人）の説明にて、右手はるかに山の姿を知る。レンズを

当てれば岸に立つ崖の山の起伏を見る。いただきにそれぞれ塔をもつ美しい五ツの小山である。◇……安倍仲磨が訪ねたという名所剣山は秦始皇帝が剣を磨きたる地、軍山は秦始皇帝駐軍の地、隋唐の時

代江中の一孤島にして白狼藉居せしと言う。呉越の時、越の□伝権が戦艦を師いて東州より兵を撃つに当たり、呉軍は鼓彦章をして防戦せしめたる曰く^いの地なり。前清の時、狼山総兵鎮を置く。◇……第一楼門の対聯に曰く、長嘯一声山鳴谷応、拳顧一顧海闊天空とあり。艦長の与えられた双眼鏡をのぞきながら絵筆を走らせたが、上記のスケッチです。陽は没せんとして、なお狼山の嶺を照らして私の作画を助けつつあるは、むべなる哉。（昭和十三年二月二十一日掲載）

⑦江陰の砲台を過ぐ



◇……古事記豊かなるをさきつつ画筆を走らせる内、晩秋の陽は大陸の空を朱に染め、没せんとす。獲物をねらう猛虎の如き我が駆逐艦はなお勇ましく長江の浪を舐に分けつつ、遡上している。◇……一日の航行に艦長はじめ士官一同、疲労の色も見せぬ真剣な

る操作であります。◇……残光の天空の下に、遙か州海関かいかん（注、税関）見ゆ。明徳五年（紀元前三五〇年頃）周の時代の築城、通州城あり。支那近代の財政家として有名な故張賽の生地にて、彼の力にて工業都市となり、紡績、榨油、製粉、製塩、漁業地として、特に通州綿は今なお有名なり。◇……江陰に近づくや右に山脈が被いて、長江を圧す。長山、肅山、恐ろしい砲が見下して山脈に並ぶ。レンズの力を借りて眺むれば、すでに先日、本艦の江陰攻撃にすでに敗れて、今はただ我が哨兵の見張りあるのみ。寒空の暮れんとする山の嶺に歩哨の姿もまた警戒の任務重いことである。◇……ここは広い長江河幅もせばまりて、長江防備第一関門にして、李鴻章の築きし砲台にはじまり流石に名勝、良き地に備えしに感じ入る。（昭和十三年二月二十二日掲載。絵の落款は「江陰砲台 昭和十二年十二月住谷画」となっている）

⑧長江の水先案内人

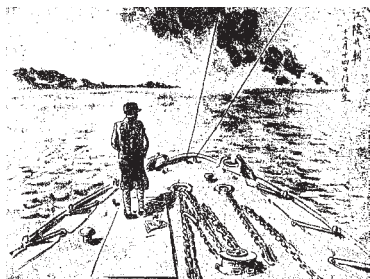
◇……兩岸の蘆の岸は毎日長江の水にくずされくずされ、土は長江の水を濁し、濁流は遠く太平洋に入りて、なお黄色く流れ、川瀬をいつも変化させる。◇……「揚子江の水



先案内人」は、長江の研究、経験の積んだ老巧な人ばかりである。海図にとらめっこして、艦橋に航海の術を操るのである。◇……支那通で世の中の酸いも辛いも嗅ぎ分けた複雑な性格の持ち主である。これらの人の過去の辛苦物語こそ、聞くべきものがある。

なかなか口をわらぬ頑強な志士も、時には愉快な酒の機嫌で私に話してくれる。◇……千変万化の長い生活は、長夜の物語にふさわしい慰めであり、その一つでも書き尽くせぬ程である。皆、憂国志士で、漢詩に、俳句、墨絵に、写真の名人。酒は斗酒を辞せず。彼、若かりし昔、支那の美女、ロシアの美女、印度の女、欧州の女、彼の掌中に眠りしならん……これは失言。「江陰の一夜」□雲の長江に士官室の夜は話にはずんで、更けてゆく。（昭和十三年二月二十三日掲載。絵の落款は「聖戦に 去年今年なき 征途哉 宮澤」の俳句と「揚子江水先に一句受く 海軍従軍画家 住谷生印」となっている）

⑨夜明けて驚く敵砲台



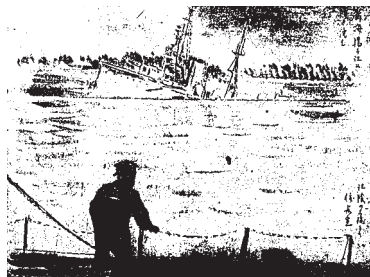
◇……ラッパの音に起き出でて、艦上の体操、未だ空も長江も暗い朝。ここは揚子江遡攻戦の第一頁の江陰である。

◇……私の昨日以来乗っているこの駆逐艦は、数日前に他の駆逐艦、砲艦等と共に、右の山上から撃ち下す敵の砲弾と激戦幾日、遂に敵を沈黙せしめた。その江陰砲台の真下に碇泊していたわけである。

◇……この砲台こそ支那軍は長い研究によって我が艦隊の上航を喰い止めるために、距離と言ひ、角度と言ひ、実に正確を期し、なお幾多の機雷をも備えて待ち受けたるを思えば、激戦の程も俤ばれるのである。黄山、東山、西山、鷺山の砲台が左上より威嚇し、右岸に天生港、十□港両砲台が堅固に備えてある。◇……江陰は往時学政の駐せし所、長髮賊の乱の後、衰微せしというが、長江防備第一関門のこととて、軍隊も配置せられ、軍港として復活し、人口も二万を越え、運河の便ありて蘇州を経て上海へ小蒸気船通

い、江南の水運交通の恩沢を浴す。古跡君山ありて支那独特の塔が今なお長江航行の船客の眼に昔日の夢を追わせることである。(昭和十三年二月二十四日掲載。絵の落款は「江陰の朝 十二月十四日 住谷生」となっている)

⑩支那巡洋艦『寧海』



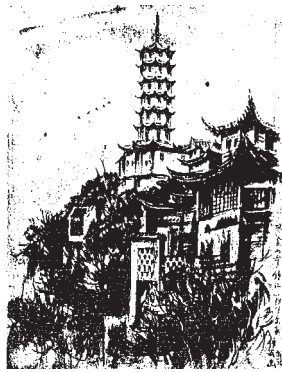
◇……北支に江南に戦況益々我が方に有利に進展しつつある時、揚子江上流の敵、南京に集結せるを遡攻する。◇

……本駆逐艦は先発の掃海艇、砲艦、巡洋艦の後を追って、勇ましく江陰を出帆。「右五十度！ ヨーンロー！」。艦橋からの命令も爽快な朝風の長江に浪を裂きて進む。昨日の航路と変わらぬ蘆と楊柳と寒村の打ち続く支那大陸の風景を遠い沿岸に眺めて進む。◇……大平野をゆるく流れる世界第五位の揚子江、人一度墜落したならば決して助からぬことになっている。と言うのは、水面は極めてゆるやかに流れても、三四尺深くは非常

な急流で、渦を卷いて流れているので、非常に危険の由である。◇……突然艦長が私を呼ぶので、急いで指差す方にレンズを廻して眺むれば、行く手、右四十度のかなたに、朝日に輝いて銀色の軍艦が沈没しかかったままの姿で、蘆の岸辺近くに淋しく沈黙しているのである。これには驚く悲惨なありさま。読者の記憶新たなる、支那一等自慢な巡洋艦「寧海」である。◇……我が国（注、播磨造船所）へ注文して華々しい進水式をして、この揚子江へ持ち帰って、支那軍を喜ばせ、今事変には支那海軍の信頼を一ツに集めた、その勇士寧海も我が精鋭なる海の荒鷲の爆撃を喰らって、ひとたまりもなく哀れな姿をさらしている次第である。◇……蘆の岸にちらほらと人影見えて、はじめは農民とのみ思い等閑にしていたところ、「艦長、便衣隊であります」と見張りの兵の報告に、艦長はすかさず機関銃が向けられてタタタタタタタター掃射する、幾人かの敵は斃されて、残りは丘を越えて楊柳の繁みに逃げ込んだ、一寸愉快なシーンであった。◇……また速力を増して進行しはじめた。これから先はぼつぼつ敵兵がいるらしい。鎮江ももう近くである。好天に恵まれて、この駆逐艦のみならず、戦線の皇軍は幸の極みである。（昭和十三年二月二十五日掲

載。絵の落款は「富海 揚子江に傾き沈む 江陰の上流より住谷生」となっている）

⑪鎮江攻略



◇……寧海の哀れな姿に心を奪われる暇もなお遡航を続ける。大陸の上空の遠く落ちた水平線の彼方に、またしても砲台を認める。左に三江宮、

爛泥套、右に□山の図山砲台がある。冬枯れの山嶺に砲筒があちら向きこちら向き、或は砲身ある砕かれ、或は傾いて江風に吹かれているのは、我が軍艦の砲撃にて敗れた姿である。◇……鎮江に近づくと、都天廟、象山の砲台ありて、三江宮から都天廟の戦いは実に揚子江での限り最も激戦の地であり、未だ炎々と焼け続けているのは、戦禍今なお新らしく、上江はじめて戦雲を知るのである。鎮江攻略には相当手古ずらせた、にくむべき砲台である。◇……〇〇將軍の所謂揚子江遡攻戦の意義を遺憾なく發揮し、支那方面

艦隊の面目を施し、幾多壮烈なる挿話を織りなしたところで、風流艦長某中佐が、海風の射撃は那須与一かなと今様源平盛衰記一句を吟じたのもここであり。某艦の私室に砲弾飛び入りてテーブルの下、艦側を撃ち抜いて、テーブルの真ん中を飛び抜けて弾は天井を粉碎した、惨状を呈したのもこの戦いのことであった。◇……今様那須与一の件はまた稿を改めることにして、焦山、甘露寺、金山寺等と名所古蹟に豊富なるを紹介したいと思う。(昭和十三年二月二十六日掲載。絵の落款は「金山寺(鎮江) 従軍画家 住谷生」となっている)

⑫甘露寺、金山寺

◇……激戦の跡鎮江は今なお火災所処にあり。レンズの力を借りれば我が陸戦隊、陸軍の兵も焼け跡に往復して、戦臭濃く、焼煙は甘露寺、金山寺の古塔を時々包みて大空に流れて行く。◇……上海から百六十マイル余りの地、南京までの間、最も大きい街にて、甘露寺は安倍仲磨、僧空海、曾遊の地としても有名にして、唐の宝曆中李徳裕の創建、徳富蘇□(注、徳富蘇峰?)の詩に、焦山万古蛇奔波／高塔金龍碧落摩／北国峰□□□老／江南江北夕陽夕 ◇



……金山寺(爆心寺) 晋の明帝の創建、江天禪寺、龍遊禪寺の勅額あり。宋朝世に忠元の允求を迎え敵を敗しし所、東坡(注、蘇東坡?)は有名な詩を残しており。◇……江の小崖焦山も支那研究者の喜ぶ所になれども、私は名所案内の役にはあらず、従軍の画家の任務あるゆえ詳細を略す。◇……しかし戦雲をよそに二三日の清遊がゆるされて、甘露寺、金山寺の高い塔を巡りて、なお城門を訪うことが出来れば、又浅薄ながらも懐古の趣味に浸るに充分なことであろうと思う。(昭和十三年二月二十七日掲載。絵の落款は「甘露寺 従軍画家住谷生」となっている)。

⑬鎮江より南京へ

◇……鎮江には残敵の姿なく、レンズに映る人人人影は、愛らしくも日の丸の小旗を掲げてあったのにも驚いた。◇……一昼夜二百二十里、航行を共にして、すっかり親しく



なった私は、士官の暇を利用

しては、似顔絵や墨絵スケッチを描き、頒ち贈りて、いさ

さかの慰めの役を務める。◇

……常々心にわだかまりなき海軍士官の、さわりの良い応対や、話題が広く海外の話にも豊富で、欧州に豪州に遠洋航海の話等に至れば、少年ら

しい心に帰って、私の想いは西に南に異国の空に飛ぶのである。◇……南京へは長い航行である。しかるに支那方面

艦隊の警備は漢口、宜昌、重慶と遡る一千四百三十マイルの上揚子江までであるを思えば、利根の流れ長しといえども、長江警備の航路も長き哉である。(昭和十三年二月二十八日掲載。絵の落款は「士官室戯画 艦長 機関長の□□

□ 主計中尉 砲術長中尉 軍医中尉 揚子江遡攻艦にて 十二月十三日 住谷画」となっている)

⑭ 戦闘用意!!

◇……いよいよ南京に近づくや黒煙濛々大空に伸びて、戦雲



のにおいを覚える。「左二十

五度の江上に何か黒い塊が見えます! 人がいるようです」と見張り□□□伝令する。一

斉に望遠鏡に全員の眼がそそがれて、一同緊張の色をなす。機銃、小銃、それぞれ配置に就く。◇……私のレンズに□

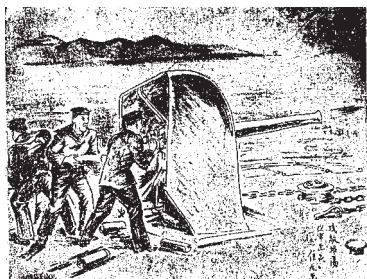
□しく残敵と見える人影焼□

ほつ杭□(注、焼けほつ杭に?) 五六人つかまって流れて来るのを認めた。続いて、なお上流に幾十のジャンクの河を横ぎるのを発見、……(注、三行破損にて不明)……ぬ

私は一時困惑したけれどスケッチブックと鉛筆を強く握って、艦橋に頑張っている。砲身も静かに前方へ向かって寄せられた。(昭和十三年三月一日掲載。絵の落款は「(破損) 揚子江遡攻撃にて(破損) 画家 住谷生 印」となっている)

⑮ 『撃ち方始め!!』

◇……浦東に、呉淞に、充分戦いに練れた尖鋭なる我が駆逐艦。時は十二月十三日、勇士たちは隼の如き勢いを全身に

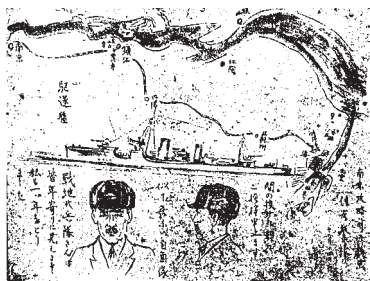


躍動させて、配置に就く。獲物は上流八百メートル千メートルの、幾十浮かぶ敵ジャンク、南京対岸浦口へ逃げ渡る武装支那兵。好き獲物、我が砲身は定まった。私は用意の綿を両耳にかい、毛皮帽子の耳被いを下して顎へかける。

◆……「撃ち方始め！」ディン！ ビルリン！ デイン！ デイン！ 撃つわ撃つわ、

砲身焼けよとばかり、跳ね上がる砲兵、水柱！ 肉眼にても良く見えるあまりに近い獲物の群、中央へはね上がった敵の身体は飛散して揚子江の藻屑となる。ジャンクの破片は一面に浮かんで水を濁す。◆……落ち着き払って砲身を僅か廻して狙い撃ち、次から次へと一発の無駄もなく、見る見るうちにさしも群がるジャンクの群れも姿は消して、流れはもとの揚子江にかえる。◆……「撃ち方止め！」。呟えたラッパの響き渡り、遠き岸までこだまして感激！まさに感激の一ト時である。（昭和十三年三月二日掲載。絵の落款は「残敵掃蕩 従軍画家 住谷画」となっている）

⑯ 忽ち敵掃滅



◆……「やっと耳の綿を取り去った私のスツケツチブツク、何を描いたのやら、砲身の真ん中へ水兵の顔があったり、発火や煙が筒先の横にあったり。従軍画家も撃ち方始め！で、全身に力を入れて敵を撃っていたのであろう。◆……僅か四十分足らずでも、

この感激のシーンは恐らく忘れ難いものとして、今後私の絵にたえずひらめき出ることであろう。◆……生活に、製作に、戦いの思い出は生涯私の精神をとらえるであろうと確信します。◆……軍艦便乗、揚子江遡攻戦！我が忠勇なる幾百幾千の将士の魂を奪った敵の片割れも、かくして掃蕩したのである。敵兵の小銃機銃の抵抗も我が方には少しの損害ないのは、いかにも不思議な幸せであった。◆……士官一、三人、私の肩をたたいて「どうでした」ときくのであるが、その顔にも未だ興奮は覚めていないようであった。「右二十度——ヨソロー」。揚子江の流れを裂い

て、また遡上る駆逐艦である。(昭和十三年三月三日掲載。絵の落款は「間の抜けた顔がご挨拶申し上げます。似ていない自画像。戦地の兵隊さんは皆年寄りに見えます。私も一ツ年をとりました。南京攻略前の戯画 住谷磐根 十二月十四日夜」となっている)

⑰揚子江上猛火に映ゆ



◇……ジャンク騒ぎも静まった頃、大陸も漸く夜が迫った。赤い落日の余光にはえた鰯雲も薄黒くなって、風さえなぎで、浪を分ける舷の音のみ。

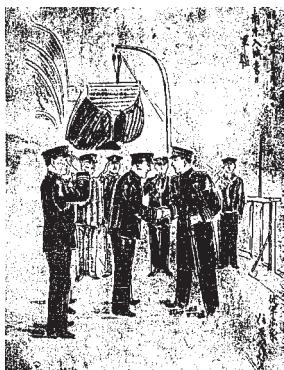
だがしかし遠かりし黒煙は近づき、焰は赤く波頭に光って、視線は焼ける両岸に注がれる。暗い揚子江の水面は赤く輝き出されて、甲板の水兵の姿が黒いシルエットに見えて、益々凄惨な夜景である。◇……艦は未だ微速で航行している。双眼鏡をのぞけば、はや火災の状態は直ぐ近く炎々として、燃える燃える。東都の震災の時のように空をこがし

て、バリバリする音まで聞こえて来た。◇……「碇用意！」。碇泊の位置が定められたのだ。「微速！ ヨーソロー」。艦は静かに南京下流沖に止まった。闇の中をすかして見れば、赤くはえた江上に幾杯かの軍艦が黒く置物の如く遠く近く止まって、中にはビカッピカッと信号している艦もある。ようやく艦橋の士官も下りて士官室に集まった。一日立ち

ずくめの艦長はじめ各士官。「ご苦労ちゃった喃！」。艦長からの慈愛のこもった挨拶に一同元氣な颯爽とした態度で、快活な眼をかがやかす。警戒管制の暗い甲板から下りて、明るい士官室は、早、煙草でみなぎる。揚子江水先人のM氏を中心に談笑、敵陣近しの感じもしない。◇……艦長の伝える言によれば、先発の各艦はこの南京に碇泊し、陸上の残敵はもはや大したことはないとのこと。陸軍も各城門を撃破し、城内は完全に我が軍の占拠するところであって、両岸の火災は陸軍や陸戦隊によって、堅固に護られてある由。いよいよ南京入城の式も一両日と予想せられて、歓喜に沸き上がる。◇……夕方の残敵掃蕩に対して、艦長は所感を述べられて、一同食事にうつる。上海出航以来、一昼夜、二百二十浬、危険極まる機雷にも触れず、しかも南京一番入りならずも、南京攻略には今後なお幾何かの戦いの

覚悟もあることゆえ、本艦の功は益々輝くことである。(昭和十三年三月四日掲載)

⑮ 南京にて旗艦〇〇を訪問

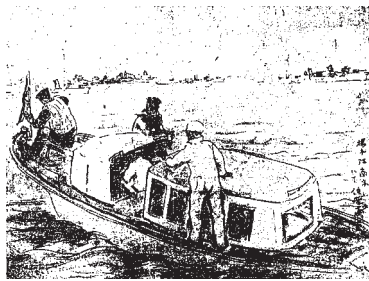


◇……碇泊の一夜は明けた。駆逐艦〇の暁の光射す甲板に私は上って見渡すと、揚子江上には先着の艦船の勇姿が遠く近く整然と浮いている。

思わず「皇軍万歳、海軍万歳」と叫びたくなる。◇……駆逐艦、砲艦、掃海艇等、それぞれ朝の光を舷側に受けて美しい限りである。その中を朝の河浪を切って内火艇が白いみおを長く引いて、軍艦と軍艦の間を走っている。◇……朝食の後、私はその内火艇に乗って旗艦〇〇へ向かった。朝靄去らぬ水面を、揚子江を渡る朝風を受けて、フルスピードで〇〇の舷側へ近づいて行く。◇……内火艇は各軍艦に備わっているが、別に高速内火艇といって、独立した一つの連絡艇がある。乗組員は八名で、いつもその小さい

舟に寝起きをして、連絡の任に当たっていますが、今事変では、上海、南京等において、この高速内火艇の働きはなかなか大したものである。涙ぐましい奮闘の八乗組員である。(昭和十三年三月五日掲載。絵の落款は「昭和十二年□月□□□ 南京入城当日 軍艦 従軍画家 住谷磐根 印」のサインとなっている)

⑯ 旗艦〇〇を訪問



◇……内火艇が私を乗せて〇〇の舷側へ到着するや、艇員が「従軍画家一名便乗」と、先任将校へ報告する。報告書類や、郵便物、託送品等が、内火艇から上げられる。私はまず士官室へ案内される。◇……士官室にはいると、士官が大勢おられて、一寸面喰らう程である。一同へ挨拶を済ませて、こんどは上の参謀室を訪問する。◇……この空気は又別である。即ちI大佐、

M大佐をはじめ、先任参謀、通信参謀、機□参謀(注、機

関参謀?）、砲術参謀、副官、所謂幕僚が颯爽と控えておられる。戦闘の命令通信、連絡の総てが、この幕僚室から各軍艦へ伝達される。◇……私は再び、士官室へ戻る。士官室には先任将校をはじめ、十数人の士官が卓を囲み休息しておられた。ほかに軍需部、工作部、陸艦隊、航空隊等の各方面の調査、連絡の打合せに来ておられる。士官及び通訳官、水先案内人、従軍記者、慰問団代表者の便乗もあり、後部の准士官室の下士官や兵員の全部を挙げれば、実に大世帯である。（南京人城前の○○にて）

（昭和十三年三月六日掲載。絵の落款は「揚子江南京にて住谷画印」となっている）

②⑩南京へ上陸第一歩

◇……○○の当直将校の許可を得て、中山碼頭の棧橋を上れば、陸戦隊の歩哨が厳然と警備している。碼頭前の広場には、昨夜の残敵掃蕩の跡を物語る、敵の兵器や自動車の壊れたのが、支那人の衣類と共に一面に散乱して、遠く見える城門の辺りまで並木道を埋めている。◇……左右の建物の裏手の火災は昨夜来燃え続けている。その中を衣類を踏み分マんで、道をはさんで城門へ向かつて歩を進むれば、

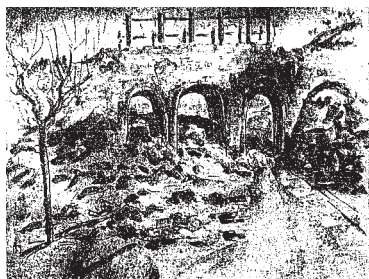


空地やクリークにも、焼け跡を巡って至るところに、敵の屍が見えて、衣類やら屍やら判然とせぬ程に散乱している。数頭の馬の土左衛門と混じって、半身水に浸ったのや、半裸体のや、しばし言葉も出でぬ。◇……勇気を鼓して城門に至る。これは挹江門やうかうもんと城壁

に示されてある。城門の三つの通路の内、二ツは土囊で塞がれ、右の通路は敵の死体で埋まり、鎧兜や、ちぎれた小銃が衣類の中に見える。◇……しかし戦線各所に、幾多忠勇なる我が勇士の倒れたるを思えば「敵死体よ、恨め、誤れる蒋政権を！」と言うほかはない。踵くびすを返して私は一トまず軍艦○○へと帰る。◇……城壁が冬の光を受けて、クリークに投影して、空も水も一色にとけ合った城外風景は、千古の昔から変らない風景であろう。南京見学には、なお残敵の狙撃を受けることを考慮して、一人歩きは危険であると思つて、急いで帰還したのである。これが敵首都南京へ上陸第一歩の私の印象である。（昭和十三年三月七日掲

載。絵の落款は「南京中山碼頭前 住谷画」となっている)

②南京城門を巡視



◇……南京上陸第一歩で、早くも凄惨見るに堪えない思いをした私は、敗残兵出沒で身辺に危険を感じて、急いで踵を返して中山碼頭近くまで来た時、同盟通信社と染め抜いた赤い旗を立てた自動車に、同盟通信社員の村上君がちょうど乗り込むところに会った。

◇……ちょうど良いチャンスとばかりに、早速便乗を頼むと、「乗り給え、だがしかし住谷君どこ迄行くのです?」。「当てはないんですよ。どうせ市内の見学ですから。この車の止まるころまでで結構ですよ」と言う訳で、私も一緒に乗り込んだ。帰りは、陸軍さんのトラックでも良いし、海軍の自動車でも見付けられると思ったからであった。◇……挹江門をくぐって、街路樹の新装道路を真直ぐに走った。海軍部と書いてある城門のようなコンクリートの立派

な門の前には、横川部隊と看板が立っていて、陸戦隊の兵士が警備していた。横川部隊長がここにおられるならば、ちょうど幸いであるから、帰りにはぜひ訪ねてみたいと考えたりしているうちに、自動車は衣類や兵器と混って散乱している敵の死体をよけつつ進む。◇……左に右に、鉄道部、軍政部、外交部、司法部、行政部、財政部等が目立つて立派な新築で、ほかの町家は極めて粗末な近代的商店の、並ぶところどころに空地あり、竹藪あり、クリークのような水溜り等がある。◇……軍政部、司法部等は我が空襲を受けて火災を起し、すでに廢墟と化している。自動車はほとんど走り続けた。この道路は南京市街を縦走する大動脈とも言うべき中山路である。自動車は市の中央部を過ぎ、とうとう市の東端である中山門近くでやっと止まったのは驚いた。◇……そこは役所風の土壁に囲まれた大きな家で、いかにも支那風に飾られた門の柱には大きく同盟通信社とチョークで書いてあって、中へ這入って見ると、庭には焚火にあたっている三人ばかりの従軍記者が村上君を待っていたのである。椅子やテーブルを庭に不規則に置かれて、食事もそこでしていたらしく、缶詰の空缶や飯盒等も置いてあった。家の中を見ると、支那軍の兵器の付属

品やベッドが沢山あって、大部荒れた家で、支那憲兵の屯所であった由である。◇……この記者たちは、三日も前からこのきたないところに泊っているとのことであるから、恐らく南京入城の陸軍と共に進んだ一番乗りの人々であろう。(昭和十三年三月八日掲載。絵の落款は「挹江門^{ゆうこうもん} 住谷画」となっている)

②新旧混合の南京市

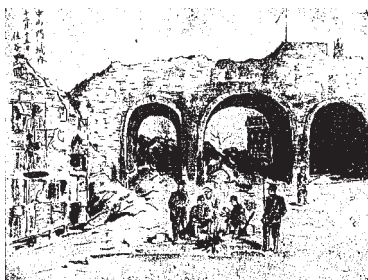


◇……南京市を巡視してまず私には「南京は、古い殻を破って、蒋政権によって新しく、都市計画の第一歩に這入ったところで、戦雲に見舞われたものであろう」と考えられる。◇……道路も舗装道路に拡張し、各部役所も新装なって、大通りだけは近代都市の形態を備えているが、支路の最も繁華な通りと見られる商店街方面はことごとく古く、あくどい、むしろ醜惡の南京の姿大部分残っている。総じて不整頓な、新旧交合で

ある。◇……なおその上に醜いことには、新建築の建物という主な建物の屋根は、防空のために、塗料で黒く塗りつぶされてあるために、上海市政府の屋根の美しい青瓦の色彩が、南京では、僅かにしか見られないのである。多くの人が、このたび南京へ来て「南京って醜い街だなあ、南京政府の膝下であるから、もつと綺麗かと思ったが」と歎いていたようである。◇……同盟通信社の人々と暫く話してから、独り私は程近い中山門の見学に向かったのである。(昭和十三年三月九日掲載。絵の落款は「南京□□住谷画」となっている)

③激戦の跡中山門

◇……中山門の近くに、青瓦に極彩色の大きな建物が野原の中に極めて不自然な調和を以って建つてあるのは、その美しい門に、中央党史料陳列館と書いてある。こればかりは立派であるが、垣根は針金で囲んだままで、未だ完成していない姿である。そこを過ぎると、城壁がいっぱいに展開されて見え、明孝陵で有名な紫金山が城壁の背景をなして聳えているのを眺めて、やっと支那本然の姿に接したような気持になった。近づいて中山門を見上げれば、城門



けた。私はその釣り鐘を撞いて見る気になった。ゲォーンと、二ツ撞いた。その唐金の古風の響きは、淋しく冬空に反響して行く、哀れな余韻の未だ消え去らぬ内に、城壁の階段をかけ下りたのである。城門の外側に出て見ると、一方は爆撃でひどく崩されてあって、その新しい崖を途中まで登ると、赤土には軍隊の靴跡が沢山残っていた。この頑強な城壁をも突き壊して、勇ましく中山門を突入したことによって、南京陥落も一層早められたのである。南京へ来たからには、南京東端の中山門を出て、紫金山、明孝陵へ足向けるべきであったが、敗残兵出沒でまだ危険の由にて、名残惜しく私は門外に、しばらく佇んでいたの

高く日章旗が翻って、まばゆいばかりである。◇……この

城門は第〇師団の勇ましく、

占領突破の所である。城門脇

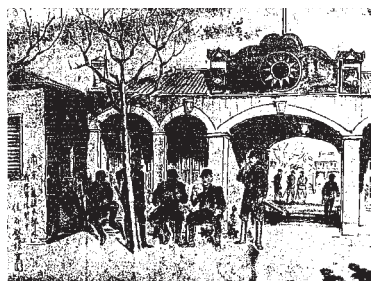
の階段を登って見ると、我が

陸軍の兵士が一人歩哨に立っ

ていた。その傍らに櫓やぐらがあっ

て、釣り鐘が下っている。何

とも言われぬ古風な感じを受



②4 国民政府参謀本部

であった。(昭和十三年三月十日掲載。絵の落款は「中山門城外 十二月十三日 住谷画印」となっている)

◇……中山門から紫金山へ通ずる道を、遙かに騎兵の一隊が近づいて来るのが見えた。

勇ましくもまた美しい光景に見入っていると、城門を進軍

する姿が見たくなって門外に

待受けた。この騎兵の一隊も、

遠く戦雲を衝いて、歴史的南

京入城の壮途を果たしたので

ある。◇……私は同盟通信社の宿所で、自転車を一台中に

入れ、これを幸い南京市内を縦横に駆け回ることにした。

古い自転車ではあったが、良く走った。中山路を引き返して

右へまがると、別な広いコンクリートの道路へ出た。そこ

に大きな新しい城門があって、上に国民政府と浮き字になっ

ていている。ここが敵南京政府の大本営であったのだ。◇

……今しも我が陸の兵士が一中隊程で昼食をたべていると

ころである。広い庭を通り抜けると、朱塗り門があつて、両側は部屋になっている。更に廊下のように石畳の通路が奥へつながつて、又左右に洋館が連なつて、更に奥の方へ真直ぐ、支那式の家が連絡して続いている。なかなか立派なものだ。国民政府の建物は、近代的な建物を支那式设计によつて造つたもので、支那軍が敗走した後のこの広大な内部は、実に雑然たるものがある。◇……庭つづきに廊下を渡ると、参謀本部の建物に連なっている。こわれてはいないが散乱した中に、泉水や、丹橋、青や朱でいろどられた古風な家が少し旧態を残している。しかし支那政權によつて使用されていた当時は、この参謀本部は相当に綺麗にされてあつたのだらうと思われる。◇……今ここには陸軍の兵士が駐屯していて、泉水の石に腰を下ろして弁当をたべたり、泉水で飯盒を洗つたりしている。静かな冬のうらら日が、旧敵軍の本部の庭に照つて、我が兵によつて昼の休息に当てられているところを見るに付けても、ここまでの戦いの思い、なお今後の戦いを考えさせられるのである。(昭和十三年三月十一日掲載。絵の落款は「南京 参謀本部内 我が陸軍休憩す 住谷磐根写 印」となっている)

②⑤ 光華門と脇坂部隊



◇……城内飛行場の宏大な原を遙かに南へ行くと光華門の激戦の様子は、当時内地へ相当詳細に報道されたとのことであるが、今なま新しい戦跡を見て、いかに苦戦であつたかを充分想像される。城門は二重になつている。通路は一つで、城外は道をはさんで

深いクリークで満々と水をたたえている。◇……脇坂部隊が紫金山を廻つて、敵の退路と覚しき南門に当る光華門に向かつて、主力と思われる強敵に激突したわけである。城門は砲撃、爆撃で、殆ど破壊されて通れぬ程である。崩された部分から城壁へ登つて見ると、敵の兵器や鉄条網が一面に散乱した中に、我が勇士の墓標が五柱、寒風を受けて建っているのである。礼拝が出来るように僅かに取り片付けてあつたので、私は墓標の一人一人の名前を丁寧によつてに記し、□り持っていた水筒の僅かに残っている水を供えて、昭和十二年十二月十日と読み、しばし黙禱を捧げた

のであった。◇……その傍には、頑丈なトーチカが二つも築いてあって、のぞいて見ると敵の弾薬箱や、ペシャンコの飯盒や、薄紺色の衣類等が残っている。足下には砲弾のかげらが散らばっている。ここを陥落させた苦心の程が思われ、この五柱の勇士の壮烈さを思う時、ひしひしと身に迫って来る感情をどうすることも出来なかった。◇……顔を上げて見渡せば、中山門の向こうには紫金山が薄紫に遠く裾を引いて見え、左手に通□門（注、通済門？）の城櫓が落日を背にかすんで見える。振り返って城外を眺むれば、クリークの水が残照に光って、民家まばらなる果てに、大校飛行場の屋根ガラスがキラキラとして見える。支那人の姿は全く見えないで、寒々とした淋しい眺めであった。（昭和十三年三月十二日掲載。絵の落款は「光華門城壁展望昭和十二年十二月十五日 住谷磐根画印」となっている）

②⑥血に飢えた野犬に追わる

◇……光華門を去り難い思いで大部時を過ごした。スケッチの道具を片づけて立ち上った。ここから揚子江の軍艦○までは約三里（注、約十二キロ）くらいはある。もし残敵に狙撃されたならばと思うと、自然に帰路を急ぐのであ



る。◇……中山路に出ると、陸戦隊や、陸軍の兵士がトラック等で走っていたり、三々五々歩いているので、私も元氣よく自転車にスピードを出して走った。行く時は自動車だったが、帰りは自転車で、あちらこちらと市内の様子に眼を向けていたので、いつか日は暮れかかり、路上の兵士の姿も段々と少なくなってきた。◇……頑張って走ったのだが、とうとう道を間違えたものと見えて、往路に見覚えのあった、鉄道部、司法院の建物の前を通らない。これはいかん、もっと走ったならと元氣を出した。ようやく城門に辿り着いた。しかし城門の様子も、辺りの様子も、全く見覚えのない、しかも城門は堅く土囊で塞がって森閑として、見上げる城壁には興中門という文字がタ闇幽かに読めた。◇……がっかりして終った。大変な間違いで、一ツ隣の城門で、近道もあるはずであるが、そこは敗残兵の危険区域である。思い返せば、途中のY字形の別の道を右へ取ったからで、引き返すに越

したことはない、急いで又走らせた。◇……冬の日はいくら暮れて何の音もしない。勿論燈火一点ない戦地の夜である。昼間あれ程通った自動車の音もしない。身に寸鉄を帯びない私は、残敵出沒のことを思い、背中に冷水を浴びる思いであつた。この時、城壁の彼方に、折柄十六夜の月が上つて、城壁を黒くシルエツトして照らし出した。ほつとして元氣を取り戻した瞬間、突然後から、犬の群れが飛び出した。◇……私の自転車の両方から吠え立てた。これには度肝を抜かれた。周章狼狽とは全くこのことであろう。

思い切つて走らせたが、両足で犬を蹴らなければならず、しかも主人を失つて数日飢えきつた野犬になつて、屍の肉を食べて、人の血を欲している。狂暴極まる支那犬が七匹である。◇……真剣に自転車を飛ばせて、やつと大の襲撃を駆逐することが出来てほつとした。ぐつしよいかいた汗が冷えたので、寒々とした。今度は陸軍の兵士が、辻に歩哨に立つていて、もしも支那敗残兵と間違えて、一発ドカんとしたれたら、折角犬を引き離しても何にもならぬと、呑気に過ごした昼間のことを後悔した。◇……しかし我れ日本人也。これを示すには、軍歌に限る。そこで軍歌を歌いながら、自転車^なを走らせた。疲れている上に、歌いなが

ら走るのも命がけであるから真剣です。その頃やつとY字形、別れ路まで戻つて来た。ここから先は一本道である。(昭和十三年三月十三日掲載。絵の落款は「人肉を喰う支那犬 南京にて 住谷画印」となっている)

⑦士官室で話の花が咲く

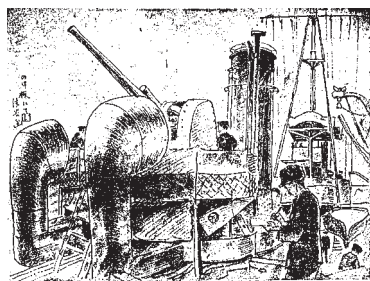


◇……軍艦〇〇の士官室では、食事が今済んだところで、先任将校Y少佐が百燭光の頭を燦然と輝かせて、今話題の中心となつて花を咲かせている最中である。私が這入つて行くと、早速「今、君の噂をしとつたところでですよ。あまり帰りが遅いので、勇ましい従軍画家さんが残敵にやられたのではないかと、心配しとつたところですよ」とにこにこして言うのである。◇……私は残してある食卓に就くや、人肉の味をしめた支那犬に追われた先刻の一件を披露に及ぶと、「そりゃあ十六ミリ

(注、十六ミリカメラ撮影)物だったが、写さんで惜しいことをした」と先任将校が言うのと、「城壁に月が上がつて住谷君、聊か旅愁を思い出したところを、犬に衝かれた態ですなア」と軍医長。◇……しかし私は真剣であった。大勢にはかなわない。「白瀬中尉の南極探検で野獣に追われる住谷画伯」と機関長。いやなかなか皆お口が悪い。「人肉を食べた犬はともうまいそうだ。陸軍さんは盛んにピストルでぶち殺しては食べているそうだ」と水先案内。「冗談じゃあない。犬なんか。まさか食べるものか。驢馬だよ、驢馬を食べるのだよ」と機関長がやり返す。◇……話は、揚子江上流の美しい風景に遷^{うつ}って行つた。三峡の險のあたり、南画そのままの風景だと言う人があると、「南画の源は揚子江の源と一所だ」と、また一方でやり返す。日本画、洋画、南画と絵の話に遷る。風向きがまた変つて来たと、私は黙って拝聴していると、「住谷さん、絵を描くには宜昌あたりまで行つたら、とても良い絵が出来ると思いますよ」と、又私の方へ話が向いた。そして盛んに上流の風景美に私の関心を誘うのである。◇……「それでは一ツ軍艦一艘、私のために上流へ差し向けて頂きましょうかな」と一本やり返すと、「まあ、待つていらつしやい。その内、

宜昌か重慶へも戦いながら上流へ連れて行つてあげますよ」と、先任将校は親切そうな手真似で言う。(昭和十三年三月十四日掲載。絵の落款は「南京にて住谷画印」となっている)

②⑧ 南画郷『長江の上流』



◇……出発に際しては上海支店へ勤務したことのある東京の知人たちからも、蘇州、湖州、杭州、太湖の南画の美しい題材の地を説明されたけれども、今私は長江を航行して、美しい風景が支那の南画の「絵空事」でない真実さを痛感したのである。◇……北支戦線においても、江南戦線でも、支那の歴史的遺物に対しては慎重にその戦禍をさけるように努力されたことについて、皇軍の風雅高潔な幾多の例を知ったが、江陰、鎮江、南京の古塔や御陵を視察して、その国境を越えた美術保存の軍精神は、流口(注、流石)に大国精神の発露であると、

敬服感謝のほかはないのである。◇……上流長江には、宜昌、歸州、巫糸、蘇州、万県の古都ありて、蘇東坡の赤壁、小孤山、岳陽樓、天然橋山、□遊洞、獅子山、風簾峽山、中肝馬峽等と数え挙げたら限りなく、皆詩人、画人、歴史家をはじめ旅行者を喜ばす所ばかりである。白楽天、李白、蘇軾等の詩情を湧かせた史蹟は、奇巖奇峽に数限りなく残されてある。◇……明孝陵（注、南京の紫金山麓にある明の太祖洪武帝を葬る陵）を訪ねた時、戦雲の寸暇を利用して、見事に兵士の引率した某都隊長と一所になった時の話であるが、我が空爆にも、砲撃にも、支那軍がわざわざ名勝古蹟を楯に陣地を張っているの、なかなか攻撃に心を痛めた由である。殊に明孝陵を保存するために、戦□を考究してやっと難を救うことが出来たということである。◇……グラフや新聞の写真に紹介された美しい支那風景に感興を踊らせた私は、今なお昔日の面影をクリークに映した静寂の風景を眺めては、南画郷□那風景の認識を新たにするものである。◇……支那為政者よ、願わくばこの典雅なる風光を思い、そのためにも一日も早く平和を約せと。極彩色の寺院の空を雁が静かに渡っているではないか。（昭和十三年三月十五日掲載。絵の落款は「□□の甲板にて

住谷画印」となっている）

②9 敵死体の傍でスケッチ

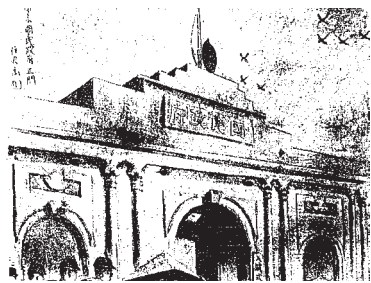


◇……夜に入りて南京市内の火災も大部納まった様子であったが、しかし残敵掃蕩の銃声は、徹宵絶えなかった。この日も私は南京巡視に足をつけて、中山路を三キロ程自転車走らせた。◇……右手へ島□曲ると有名な鼓樓（注、ころう）もともと太鼓で昼夜の時刻を報じた楼。日本大使館の横に位置）というのがある。後日、南京の親日派によつて治安維持会の発会式が行われたところである。立派な建物であるが、今空家でも閉ざされ、あちらこちら窓硝子も甍もこわれたままで、見るべきものはない。◇……ここから少し露地を這入ると、右に避難民区域と大きく張り出された布が下っている。避難民の群衆が、唯ぼんやりと、何をするにもなく、突つ立っている者、うごめいている者、俄作りの哀れな露店を囲んで、何やら

買食いしている者。日の丸の腕章を付けた者等が、幾百人に分らぬ程に、この避難区域にいる。私は敗戦の哀れな国民の姿をここにも濃厚に見られたのである。◇……この避難区域の中に、金陵女子大学というのがある。竹矢来^{たけやらい}の粗末な垣根の外から仰ぎ見る金陵女子大学の建物は極彩色の立派な建物であるが、屋根は防空の色に塗られてある。垣根の中を覗いて見ると、校舎は幾棟もあって、石畳の歩道が庭内を縦横に立^{ママ}つていて、若い女の姿がちらほら見えた。金陵女子大学は、上海の復旦大学と共に、抗日教育の最高学府と見られている。◇……残敵が相当この避難民区域へ逃げ込んでいるとのことで、危険な所である。私は次に方向を代えて、中山路の左の丘陵に足を向けたのである。北極閣^⑤（注、標高五十メートル、南京第一の眺望の地点、その西方山腹に守備隊兵舎があり、要害の地として以前は登山禁止）、鶏鳴寺^⑥（注、古くから城兵の駐屯地ともなった要害の地にして景勝の地）等があって、遊覧地区ではあるが、林の中の鉄道踏み切りの附近には、敵遺棄死体があちらこちらにごろごろしている。◇……私は写生の道具を広げて、北極閣や紫金山を写生した。二時間である。北極閣も鶏鳴寺も見物の価値あるところとして、南京の名所であ

るが、見物でできなかった。僅かに玄武門から玄武湖の清澄な水に紫金山を眺めて、五洲公園の游船の昔日を想像して帰路に就く。（昭和十三年三月十六日掲載。絵の落款は「北極閣附近 南京にて 住谷画印」となっている）

③〇南京入城式に参加



◇……南京入城式の当日は、我が軍艦の勇ましい姿を揚子江上に沢山眺められた。◇……私は例によって、専用自転車で、式場である国民政府へ向かって、中山路を走らせた。道路も大部整理されて、陸軍の各部隊の行進で広い道路はいっぱいである。勇ましい武勲を語る軍旗、騎兵、砲兵、戦車隊は限りなく続いて、中山門外まで絶え間がない程である。海軍陸戦隊と、水兵の黒服は特に目立って見えた。どの兵士の顔も、感激の色に満ちている。◇……一通り行進を見て、私は勝手知ったる国民政府の門前に着いた。従軍記者や、写真班等が一团

となつて、同門の正面に陣取っていた。従軍画家も数人の顔が会つて、「やあ、やあ」と感激の中に挨拶し合つた。暫らく待つと、ラッパの響きが遠くから聞こえて来て、厳肅な気がみなぎつた。やがて黒い自動車が静かに城門の前に止まつて、長谷川司令長官と藤野副官とが降り立った。

◇……静肅なままで暫くたつた、と又ラッパの音が勇ましく明朗に響き渡つて来た。馬蹄の響きが、整列の軍隊の向こうから近づいて来る。松井軍司令官である。続いて朝香中將宮殿下のお姿が拝された。城門前にて御下馬遊ばされて、厳肅の中を御颯爽と、城内へ歩み進まれたのである。

◇……城門外の正面にいる私たちには、内部の様子は充分判らなかつたが、式が執行されている様子である。◇……莊嚴な雰囲気全体にみなぎつた時、君が代の拝唱が始まる。ラッパの響きに和して、歴史的国旗掲揚、晴れ渡つた碧空に素晴らしく大きい日の丸の旗は城門高く掲げられて、今のラッパの響きは支那大陸はおろか、全世界の津々浦々まで響き渡るかと思われる程に感じられて、暫らくは感激に声なく、ゆるやかに靡く国旗を仰いだことである。◇……限りなき感激を胸に抱きて、私は一人帰路に就いたのであつた。南京入城の光景を、従軍画家として感激の限り

を尽くして、ただただ凝視するのほかになかつた自分であることを思つたのである。(昭和十三年三月十七日掲載。絵の落款は「南京国民政府正門 住谷画 印」となっている)

③記念の寄せ書き



◇……敵首都、南京入城式の夜は軍艦安宅の士官室にあつても記念の祝杯を挙げた。私は良い折りを見計らつて、寄せ書きをお願いすることにした。近藤司令官をはじめ艦長、幕僚の方々や、士官室の方々の記念の寄せ書きには、おの感慨深いものがあつた。

◇……その夜私は内火艇に乗つて、O号掃海艇にM艇長を訪問した。この掃海艇の士官室でも入城式の感激に、士官の血をわかせていたのであつた。掃海艇の苦心の戦況を尋ねて、大いに掃海艇という物に認識を深めたのである。そこで私は士官たちの希望に従つて、色紙に、墨絵、似顔絵を描いて、いささか慰問の意を表したのである。◇……こ

の掃海艇での寄せ書きもなかなか面白いものであった。二百二十哩薄氷を踏む南京入城快なる哉。これは艇長M少佐の書かれた感想であって、揚子江遡攻戦に、幾多敵の封鎖船、機械水雷等を掃海しつつ、危険を冒して、南京まで進撃し、軍任の成果を物語る艦長の偽らざる感想であるかも知れぬ。愉快なる入城式の夜であった。◇……因に寄せ書きの一部をご披露致します。神武必勝、南京開城 Y大佐

／幸運これ参戦入城の日 商女不亡国恨 M大佐／金陵城外感慨無量 F中佐／雄飛五大洲極天護皇基 F少佐／皇風度万国南京入城 S大尉／氣迫万難を排し南京入城

海軍重砲隊の士気天を衝く Y大佐／江風靡箕簇入城南京

M中佐／征馬行く野□に咲けり姫小菊 M大佐／作戦

審機先而決呼吸 聖戦 くるがねの砲に幼児けがもせて M少佐。その他、熱血痛快なる書が沢山ありましたが、いず

れお目にかける日があると思う。(昭和十三年三月十八日

掲載。絵の落款は「□□□□□人 □黒ノ家 (判読不明)

印」となっている)

③2 感激は続く慰霊祭

◇……慰霊祭に向かう掃海艇長M少佐に従って、私は内火



艇に同乗して中山碼頭に向かった。揚子江にも冬は訪れて、寒い江風は身を切る程であった。◇……碼頭前の広場には、〇〇艦長、幕僚、各艦長、艇長等が颯爽と集まって、これから慰霊祭へ向かわれるところである。M艇長の紹介

で計らずも、前中(注、前橋中学校)出身の田村劉吉中佐にお会いしたのである。中佐は私が従軍したことは上毛新聞を見てすでに知って、新聞記者や他の従軍画家に尋ねたりして、私を探しておられたとのことであった。大変喜ばれて、早速自分の自動車に私を誘って下さるので、私も同乗の榮に浴して慰霊祭式場へ向かったのである。中佐は第一掃海艇の司令であって、目下第〇号掃海艇に乗っておられる。そして「今晚、私の船へお出下さい」とお勧めを受けた。◇……南京市街は昨日の入城式の時の如く、陸海軍の各部隊の行進で、勇ましく街に汪溢している。式場は中山門に近き城内飛行場である。宏大な原には、すでに各師団の名札が所定の位置に立てて

あつて、各方面から行進して入城する勇ましい有様は、さながら一幅の絵巻物を見る如くである。指揮官の号令は各所に聞え、整列の広さは実に一望眼界（注、視界）に見渡せぬ程であつた。◇……原の中央には「中支方面陸海軍戦病没将兵之靈標」と記された、高い慰靈標が建てられてある。その周囲には赤、白、青、黄、紫等の長い旗が翻り、各方面から贈られた花輪が供えられてある。数人の神官はその傍に着席して、式の始まる時刻を待った。私は従軍の記者、写真班、映画班の人々と共に、慰靈標に近い花輪と神官の後方に控えていた。直ぐ近くではラジオの録音放送の備えがあつた。◇……やがて囃（りやうりやう）々、喇叭（らっぱ）は響き渡り、朝香中将宮殿下のご着席、松井軍司令官、長谷川司令官の着席がすむと、神官が立つて慰靈標の前に進み、祭司は慰靈祈詞を捧げた。◇……この時、海軍軍楽隊は国歌君が代の吹奏を始めたのである。◇……殿下の玉串奉奠（ほうけん）の後、松井軍司令官、長谷川司令官の玉串奉奠があつて、次に日高領事（川越大使代理）の玉串奉奠が済むと、松井軍司令官に次いで、長谷川司令官の礼願慰靈の辞があつた。やがて軍楽隊の荘重なる吹奏楽が始められたのである。◇……事变勃発以来、勇戦奮闘、長驅戦雲を衝いて進撃し、遂に南京

に迫り、敵の首都南京をも陥落せしめて、今ここに——壮烈な最期を遂げて護国の鬼と化した——部下の霊を思い、戦友を思う、幾万の将士の感慨無量なる衷心を——私は想像して感激の極みであつた。——◇……紫金山（おろし）風は、幾千年幾万年変わらずとも、今日吹く風は、尊い勇士の霊に対して、幾何かの情を贈ることと思われた。◇……原の果てに隊伍を正しく退場する我が将士にも、また遠く故国に在つて銃後を守る国民にも、なお懸つて重大なる使命が幾多残されてあることを切々に想い、万感措（お）く能わざるものがあつた。（昭和十三年三月十九日掲載）

注

- (1) 住谷「点描 武蔵野」（武蔵野新聞社、昭和五十五年）の奥付参照。
- (2) 手島仁「海軍従軍画家・住谷磐根」『群馬県立歴史博物館紀要』第二十九号、二〇〇八年、五九頁～六一頁。住谷家と磐根の生涯についてはこの「海軍従軍画家・住谷磐根」と住谷磐根『点描 武蔵野』に拠った。
- (3) 「証言による〈南京戦史〉」⑩「三一頁、『偕行』昭和六十年（一九八五年）一月号。住谷の証言の初出は『東郷』昭和五十八年十二月号。
- (4) 南京突入直前の海軍の戦闘については東中野修道『再現

南京戦』（草思社、平成十九年）一〇四頁以下を参照のこと。

（5） 佐藤大雄『南京の古蹟』（昭和十八年、昭和四十一年、私家版）四一頁、六四頁。

（6） 佐藤『南京の古蹟』六五頁。